

# 『日本書紀』古写本にみる助数詞「枚」の 訓みと対象語

張 翔

## 1. はじめに

『日本書紀』には、数多くの助数詞<sup>1)</sup>がみられる。三保(1995)では、『日本書紀』本文における助数詞、および古訓における助数詞といった二つの側面から『日本書紀』の助数詞を分析している。また、王(2019)は、助数詞「枚」についてその原義から始め、中国語量詞「枚」に対し、用法上の歴史的変遷を調査し、さらに、日本語助数詞としての「枚」を、上代から近世以降まで通時的に考察している。本稿では、これらを受けて『日本書紀』における助数詞「枚」を考察対象<sup>2)</sup>とし、各古写本(影印版またはウェブ上公開されたものなど)で「枚」の訓みと対象語を調査し、その訓みと対象語との対応関係を明確にすることで、『日本書紀』における助数詞「枚」の訓みと、その妥当性を検討する。

## 2. 中国古典籍及び日本の古辞書における助数詞「枚」

まず、中国の古典籍を確認する。『説文解字』では、「幹也、可為杖、从木、从支」と記載され、「幹」の意を表わす。『漢語大詞典』によると、「枚」は、『詩経』(周南・汝墳)の「遵彼汝墳、伐其條枚。」や『毛伝』「枝曰條、幹曰枚。」のように、本来の「幹」の意味を持つ一方、中国の古代(『日本書紀』成立するまで)においては、「人」、「鹿子巾」、「弩」、「刀」、「矛」、「戦楯」、「匕首」、「筆」、「鎧」などを対象に助数詞としても「枚」は用いられた。また、王(2019)がまとめた「中国語量詞「枚」の用法変遷」の表<sup>3)</sup>も参考したうえ、これらの対象語の性質や形状を基準にして、①糸を張ったもの(弩など)②棒状のもの(刀、矛、匕首、筆など)③単独で一つの塊になっているもの(印、鶏卵など)④薄くて平らなもの(鹿子巾など)⑤幅が広く、平らなもの(戦楯など)、⑥動植物(猿、羊、瓜、橘、棗など)⑦衣類、着るもの(鎧、黄帔など)といった七つの類に分けた。

次に日本の古辞書の記述を確認する。『類聚名義抄』<sup>4)</sup>には、「枚」..梅箇・カラ・ムチウツ」とあり、『色葉字類抄』<sup>5)</sup>には「枚ヒラー | 紙等数」(前田本と黒川本のいずれも)とある。ここでは、最も重要な要素は、「カラ」(「柄」と「ムチウツ」(「鞭」)の二つである。カラと読まれるには、棒状のものに近く、ムチまたはムチウツと読まれる場合は、ものの全体が棒状や带状であって、手で握るところは棒状であろう。『色葉字類抄』前田本と黒川本のいずれも、「枚ヒラー | 紙等数」と記載されている。両辞書を見た結果、古くから、「枚」は、「箇」と共通し、訓みが「カラ」、「ムチウツ」である場合、棒状や带状のものに用いられ、ヒラと読まれる場合は、紙(薄くて平らなもの)を数えるのに用いられる助数詞であると分かった。

王(2019)は、過去の論文で「中国語の『枚』の使用には、いずれの時代においても『薄くて平たい』という使用傾向が見られなかったことが確認できる。」と述べていたが、実はそれが分類の基準による結論であり、ものの形状から見ると、「鹿子巾」、「黄帔」、「布紙」のような対象語も存在する。

### 3. 『日本書紀』における助数詞「枚」

『日本書紀』に出ている助数詞「枚」のすべての用例を収集するにあたって、『日本書紀』原文検索<sup>6)</sup>を利用し、「枚」の訓みを『新訂増補国史大系日本書紀(前篇・後篇)』(略号:〔史〕)と諸写本で訓を確認した。調査に用いた諸写本は以下の通りである。また、助数詞「枚」の対象語に下線を引いて記す。

岩崎本 ⇒ 京都国立博物館編『京都国立博物館所蔵 国宝 岩崎本日本書紀』(勉誠出版、2014年)(略号:〔岩〕)また、石塚晴通・築島裕(1978)『東洋文庫蔵 岩崎本日本書紀本文と索引』では、訓点の加点年代について、①平安中期末点、②院政期点、③室町時代宝徳三年点及文明六年点(共に一條兼良加点)の三種類に分けているため、明記した。

図書寮本 ⇒ 国立国会図書館デジタルコレクション(『日本書紀 秘籍大観(帖之部)』大阪毎日新聞社、1926年により、デジタル化したもの)(略号:〔寮〕)

熱田本 ⇒ 熱田神宮編『熱田本 日本書紀(全3冊)』(八木書店、2017年)(略号:〔熱〕)

北野本 ⇒ 国立国会図書館デジタルコレクション（貴重図書複製会編『日本書紀 国宝北野本』〈貴重図書複製会、1941年〉をデジタル化したもの）（略号：北）

伊勢本 ⇒ A 穂久邇文庫本（影印本『神道大系古典篇 日本書紀 上・中・下』〈神道大系編纂会、1983年〉）

B 御巫清白氏旧蔵本（影印本、神宮古典籍影印叢刊編集委員会編『神宮古典籍影印叢刊 2 古事記・日本書紀（下）』〈八木書店、1982年〉）（略号：勢）

兼右本 ⇒ 天理大学附属天理図書館編『天理図書館善本叢書和書之部 54～56 日本書紀 兼右本一～三』（八木書店、1983年）（略号：右）

内閣文庫本 ⇒ 国立公文書館デジタルアーカイブによるもの（略号：閣）

例1 以造天平瓮八十枚（『日本書紀』卷三、神武紀戊午年）

史：キ・テ・チ 熱：チ 北：チ 勢：AチBチ 右：チ 閣：チ

例2 於是、天皇甚悦、乃以此埴造作八十平瓮・天手挾八十枚

（『日本書紀』卷三、神武紀戊午年）

史：チ 熱：チ 北：チ 勢：AチBチ 右：チ 閣：訓なし

例3 即作葉盤八枚、盛食饗之（『日本書紀』卷三、神武紀戊午年）

史：ツ 熱：訓なし 北：ツ 勢：AツBツラ 右：ツ 閣：ツ

例4 天皇夢有神人、誨之曰、以赤盾八枚・赤矛八竿、祠墨坂神（『日本書紀』卷五、崇神紀九年）

史：ツ 熱：ツ 北：ツ 勢：Aツ 右：ツ 閣：ツ

例5 亦以黒盾八枚・黒矛八竿、祠大坂神（『日本書紀』卷五、崇神紀九年）

史：訓なし 熱：訓なし 北：ツ 勢：A訓なし 右：訓なし 閣：訓

なし

例6 仍以五色綵絹各一匹、及角弓箭、并鉄鋌四十枚、幣爾波移

(『日本書紀』卷九、神功皇后摂政四六年)

史: ネリ・フル 熱: ネリ・フル 北: 欠 勢: A フル・ネリ 右: ネリ・フル 閣: フル・ネリ

例7 是歳、百濟太子余豊以蜜蜂房四枚、放養於三輪山(『日本書紀』卷二四、皇極紀二年)

史: ヒラ 岩: ヒラ・ツ (詳細: ①ツ・②ツ・③ヒラ<sup>7)</sup>) 寮: 訓なし  
北: ヒラ 勢: A 訓なし 右: ヒラ 閣: ヒラ

例8 討肅慎、献生熊二・熊皮七十枚(『日本書紀』卷二六、齐明紀四年)

史: ヒラ 北: ヒラ 勢: A ヒラ 右: ヒラ 閣: ヒラ

例9 又、高麗使人、持熊皮一枚称其価曰、綿六十斤(『日本書紀』卷二六、齐明紀五年)

史: 訓なし 北: 訓なし 勢: A 訓なし 右: 訓なし 閣: 訓なし

例10 借官熊皮七十枚、而為賓席(『日本書紀』卷二六、齐明紀五年)

史: 訓なし 北: 訓なし 勢: A 訓なし 右: 訓なし 閣: 訓なし

例11 刀子六十二枚賜椽磨等(『日本書紀』卷二七、天智紀六年)

史: 訓なし 北: 欠 勢: A 訓なし 右: 訓なし 閣: 訓なし

例12 十一月辛巳朔、賜新羅王絹五十四・綿五百斤・羣一百枚

(『日本書紀』卷二七、天智紀七年)

史: 訓なし 北: 訓なし 勢: A 訓なし 右: 訓なし 閣: 訓なし

例13 是日、賜新羅王絹五十四・綿五十匹・綿一千斤・羣一百枚

(『日本書紀』卷二七、天智紀十年)

史: 訓なし 北: 訓なし 勢: A 訓なし 右: ヒラ 閣: 訓なし

例 14 乙卯、大学寮献杖八十枚（『日本書紀』卷三十、持統紀三年）

〔史〕：カラ 〔北〕：カラ 〔右〕：ヒラ 〔闕〕：訓なし

例 15 綿五屯・布一十端・銚一十枚・鞍一具（『日本書紀』卷三十、持統紀三年）

〔史〕：訓なし 〔北〕：訓なし 〔右〕：ヒラ 〔闕〕：訓なし

例 16 筑紫大宰粟田真人朝臣等、獻隼人一百七十四人、并布五十常、生皮六枚

（『日本書紀』卷三十、持統紀三年）

〔史〕：訓なし 〔北〕：訓なし 〔右〕：訓なし 〔闕〕：訓なし

例 17 鹿皮五十枚（『日本書紀』卷三十、持統紀三年）

〔史〕：訓なし 〔北〕：訓なし 〔右〕：訓なし 〔闕〕：訓なし

例 18 浄冠至直冠、人甲一領・大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚

（『日本書紀』卷三十、持統紀七年）

〔史〕：訓なし 〔北〕：訓なし 〔右〕：ヒラ 〔闕〕：訓なし

例 19 勤冠至進冠、人大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚、如此預備

（『日本書紀』卷三十、持統紀七年）

〔史〕：訓なし 〔北〕：訓なし 〔右〕：訓なし 〔闕〕：訓なし

図書寮本、北野本と内閣文庫本の三つの写本をインターネットで公開された情報で、ほかの版本は上に記した通り、影印本で「枚」の訓みを確認した。その中、伊勢本については、岩波書店『日本古典文学大系日本書紀上』<sup>8)</sup>の冒頭にある「諸本紹介」により、Aの穂久邇文庫本と、Bの御巫清白氏旧蔵本に分けて明記する。北野本に関しては、『国宝北野本日本書紀解説』によると、卷九の十三年春二月より四十九年春二月までの分が脱落しているそうであるため、用例6の訓みを確かめることができなかった。「枚」の訓みを集計するにあたり、写本に訓み（傍訓など）が見られないもの、用例に写本が存在しないものに対し、「訓なし」で、写本自体の遺失や闕失、また例11のように写本にもともと訓がふられたはずだが、虫食い

による弁別困難の訓みに「欠」と記す基準である。

上記の19例を一見すると、助数詞「枚」は、天平瓮、八十平瓮、天手挾、葉盤、赤盾、黒盾、角弓箭、鉄鋌、蜜蜂房、熊皮、刀子、韋、杖、鋏、牛皮、鹿皮、鞆の計17種の品物に、少なくとも奈良時代では既に用いられたようである。さらに、こういった17種のをその性質や形状などに基づいて、以下表1のように、五つのカテゴリーに分類した。

表1 分類のカテゴリー、対象語と訓みの対照表

分類のカテゴリー	対象語	訓み
(イ) 平らな皿、器のような容器類。	天平瓮(例1)、八十平瓮(例2)、天手挾(例2)、葉盤(例3)	キ(例1)・チ(例1、例2)・ツ(例3、4、5、例7)・ツラ(例3)
(ロ) 薄くて平らな皮革など。動物の革類。	熊皮(例8・9・10)、韋(例12・13)、牛皮(例16)、鹿皮(例17)	ヒラ(例7、8、例13、14、15、例18)
(ハ) 幅の広く、平らなもの。	赤盾(例4)、黒盾(例5)、蜜蜂房(例7)	ツ(例3、4、5、例7)・ヒラ(例7、8、例13、14、15、例18)
(ニ) 棒状のもの。	角弓箭(例6)、鉄鋌(例6)、刀子(例11)、杖(例14)、鋏(例15)	ネリ(例6)・フル(例6)・カラ(例14)・ヒラ(例7、8、例13、14、15、例18)
(ホ) 単独で、一つの塊になるもの。	鞆(例18・19)	ヒラ(例7、8、例13、14、15、例18)

表1を確認したところ、現代日本語の助数詞として「枚」の読みは「マイ」ではなく、それと比べるとずいぶん数多く見られる。

例1の訓みの「テ」は、『新訂増補国史大系』に表れたものである。北野本の実際の写本では、「テ」ではなく、「チ」とはっきり訓める。おそらく、『新訂増補国史大系』の誤りではないかと考えられる。例2の伊勢本A穂久邇文庫文には「ヂ」と付けられているが、「チ」に統一する。

誤りの可能性がある「テ」と、濁音化の「ヂ」との二訓を除いて、『日本書紀』における助数詞「枚」の訓みは、「キ」、「チ」、「ツ」、「ツラ」、「ネリ」、「フル」、「ヒ

ラ]、「カラ」の八種類が確認された。

続いて、助数詞「枚」の訓みと対象語の間には、どのような関連性があるかを明らかにする。助数詞としての「枚」は対象語も、訓みも、バリエーションが多くみられる。特に「ヒラ」と「ツ」の二つに対応する対象語は比較的多い。「ヒラ」は動物の革を数える助数詞の訓みの代表でありながら、それ以外、杖、刀子、鍬のような棒状の物を数えるのにも用いられる。「ツ」は、薄くて平たい動物の革類に相応しくない訓みであろう。「ネリ」、「フル」の二つは、例6の角弓箭と鉄鋌に用いられる特殊な訓みである可能性が高い。

#### 4. 『日本書紀』における「枚」以外の各訓みに対応する助数詞

『時代別国語大辞典上代編』(以下『時代別』とする。)にある「上代語助数詞一覧」(以下「一覧」とする。)で、助数詞「枚」八つの訓みに読み得る助数詞表記(同訓異字の助数詞)を調べた結果、次の表2にまとめた。

表2 各訓みに対応する「枚」以外の助数詞表記及び対象語

本稿 考察の 助数詞	訓みの パターン	各訓みに対応する「枚」 以外の助数詞表記	対 象 語
枚	キ	領/木/樹	毳毼、甲、綿袍、鎧、袈裟、衾
	チ	箇/介/口/頭/丸 /顆(果)/鋌(廷) /頂/烟/歳/年	磐石、御統、眞坂樹、野薦、少女、小男、天目、竹林、羽太玉、足高玉、赤石玉、品部、蒜、全袍、匏、駱駝、驢、蝦夷、鑰匙、鑰、木印/使/槽、出石小刀、劔、大刀、七枝刀、(人間)、奴、高麗奴、人奴、狛虜、斧、金飾刀、銅鑊鍾、掖玖人、夜勾人、掖玖人、(男子数)、鍬、唐俘、神刀、唐人、刀、鐮、刀子、鎌、従人、奴婢、新羅人、鍾、鉢、(人)/國民、(子供)、白鹿、羊、鮪旗、水牛、犬、騾/鐵/(経過した年数)、年/(経過した年数)、歳

枚	ツ	筍／口／頭／ 疋*／狗／隻／ <span style="border: 1px solid black;">丸</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">顆</span> (果)／ <span style="border: 1px solid black;">鋌</span> (廷) ／片／枝／竿*／ <span style="border: 1px solid black;">前</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">坐</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">足</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">脚</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">腰</span> (要) ／面／領／ <span style="border: 1px solid black;">舌</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">床</span> ／ 間／ <span style="border: 1px solid black;">字</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">文</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">錢</span> ／歳 ／年	磐石、御統、眞坂樹、野薦、少女、小男、天目、竹林、羽太玉、足高玉、赤石玉、品部、蒜、全匏、匏、駱駝、驢、蝦夷、鑰匙、鑰、木印／槽、出石小刀、劔、大刀、七枝刀、(人間)、奴、高麗奴、人奴、狛虜、斧、金飾刀、銅鏤鍾、掖玖人、夜勾人、掖玖人、(男子数)、鍬、唐俘、神刀、唐人、刀、鏝、刀子、鎌、従人、奴婢、新羅人、鍾、鉢、(人)／國民、(子供)、白鹿、羊、鮪旗、水牛、犬、驛／錦／犬／矢、白鳥、鴻、船、鶴、孔雀、白雉、鸚鵡、舶、舟、山鶏、赤鳥鷓／鐵／火／杜樹、出石梓、賢木、船、鹿角／赤矛、黒矛、香菓、五色幡／日鏡、七子鏡、鼓／髭髯、甲、綿袍、鎧、袈裟、袈／假廢、屋／(経過した年数)、年／(経過した年数)、歳
	ツラ	連*／ <span style="border: 1px solid black;">烈</span> (烈)／ <span style="border: 1px solid black;">貫</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">編</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">行</span>	箭竹
	ネリ	なし	なし
	フル	なし	なし
	ヒラ	張／ <span style="border: 1px solid black;">紙</span> ／ <span style="border: 1px solid black;">扇</span>	弓、韋、鹿皮
	カラ	枝*／口*	杜樹、出石梓、賢木、船、鹿角／槽、出石小刀、劔、大刀、七枝刀、(人間)、奴、高麗奴、人奴、狛虜、斧、金飾刀、銅鏤鍾、掖玖人、夜勾人、掖玖人、(男子数)、鍬、唐俘、神刀、唐人、刀、鏝、刀子、鎌、従人、奴婢、新羅人、鍾、鉢、(人)

助数詞表記欄 ( ) のなかにある字は、本来の漢字の異体字を意味する。同欄、□で囲んでいる漢字表記は、『日本書紀』に該当する用例がないことを指す。「他の対象語」欄の ( ) にある内容は、助数詞の使用対象として文章に現れず、前後の文脈により推測されたものである。／は、異なる助数詞用字またその対象語の間に挟んでいる目印である。その訓みに対応する助数詞表記と対象語がないものには「なし」と記す。「※」は、用字(表記)としては、『日本書紀』には助数詞として現れているが、各写本の確認による訓みは助数詞「枚」八つの訓みにいずれも該当しないことを示す。例えば、「枚」以外、「カラ」と読み得る助数詞表記は「枝」と「口」の二字があるが、日本書紀では、いずれも「カラ」と訓まれず、別の訓みになっている。なお、「チ」と「ツ」の二つは、母音交替によるため、同じと見なしている。

#### 4.1 「キ」と読み得る助数詞表記とその対象語

「キ」と読み得る助数詞表記は、「枚」以外、『日本書紀』には、「木」と「樹」の二つの助数詞がなく、「領」のみがあった。『日本書紀』における助数詞「領」の対象語は、髭髭、甲、綿袍、鎧、袈裟、袈の六つであり、すべて着るもの、かぶるものであるため、おそらく動詞「着る」の連用形から変化してきた助数詞であろう。『時代別』の「一覧」に、この点について「キは着の意」とある。『時代別』によると、動詞として「キル」は、「着る。衣服などを身につける。まとう。」と「笠などをかぶる。」との二つの意味を有する。いわゆる、「着る」だけでなく、「かぶる」の意も含まれ、両方を同時に考えるべきである。用例1の訓み「キ」は、助数詞「枚」の対象語には当てはまらず、『国史大系』の訓の誤りだという可能性もなくはない。

#### 4.2 「チ」、「ツ」と読み得る助数詞表記とその対象語

「チ」と読み得る助数詞表記は、「枚」を除き、『日本書紀』には、「箇」「介」「口」「頭」「鋌(廷)」「歳」と「年」の七種で、「ツ」は、「箇」「口」「頭」「疋」「狗」「隻」「鋌(廷)」「片」「枝」「竿」「面」「領」「間」「歳」と「年」の十五種がある。「一覧」によると、「ち」では、「計算される対象は『つ』に同じ(十〇の倍数にあたる時『つ』が『ち』となる。ただし、その形が連体修飾語となるときおよび他の体言を後項として複合語を形成するときには『つ』となる。)」だとされている。『時代別』によると、「つ」は、「数を数えるときに添える助数詞。全体として体言の資格で用いるが、すぐ下に名詞を伴って複合語を作ることもある。ちとも。」と記載されている。「ち」と「つ」は母音交替で形成された二つの形であり、場合によって相互に置き換えて用いられる。

助数詞「枚」が「ツ」(ちも含む)と読まれる同訓異字助数詞の対象語を調べた。膨大な量である対象語を大きく言えば、樹木、杵、刀、船、人間(人)、斧、鐘、鋏、鎌、石、御統、竹林、玉、駱駝、木印、匏(瓢、フクベ)、白鹿、羊、水牛、狗、鐵、火、矢、白鳥、矛、鏡、鼓、部屋のような具体的なものもあれば、経過した時間、年月を数える抽象的なものもある。訓みに関しては、ほとんど汎用性の高い「ツ」(ちも含む)になっているが、助数詞表記によって異なる。例えば、「箇」の場合は、「箇」との共通関係で、「ツツ」と訓まれた例もしばしばある。人間を表わす例22には、「リ」の訓みも確認できる。「口」の場合は、同じく人間を表わす例23には、「ユ」、例24には、「リ」、例25には、「タリ、タへ」の訓みも確かめられる。ただ、例26の「斧」に対する訓みは、「クチ」となっている。

例 22 乃驚而求之、都無所見、頃時、有一箇小男、以白薺皮爲舟、以鷓鴣羽爲衣、隨潮水以浮到。(卷一、神代紀上)

例 23 由是、大海欣悅、不能自默、以韓奴室・兄麻呂・弟麻呂・御倉・小倉・針六□送大連、吉備上道蚊嶋田邑家人部是也。(卷十四、雄略紀九年)

例 24 秋九月、百濟聖明王、遣前部奈率眞牟貴文・護德己州己婁與物部施德麻奇牟等、來獻扶南財物與奴二□。(卷十九、欽明紀四年)

例 25 三月、掖玖人三□歸化。(卷二十二、推古紀二十四年)

例 26 但奉好錦二疋・髭毳一領・瓮三百□・及所獲城民男二女五。(日本書紀、卷十九、欽明紀十五年)

#### 4.3 「ツラ」と読み得る助数詞表記とその対象語

「ツラ」と読み得る助数詞表記は、「枚」を除き、「連」のみ『日本書紀』に用例があり、「箭竹」を数えるのに用いられる助数詞である。「一覽」によると、訓みの「ツラ」に「連なったもの、また連ねられたもの」といった意味があり、形状に対応しているようである。また、例 27 の「連」については、北野本『日本書紀』で訓みが「ツラ」ではなく、「ムラ」だと明確に確かめられた。一方で他の古写本では、訓みの確認ができなかった。ここの「連」は、性質や形状的には、助数詞「枚」の対象語との関連性が、前述の「キ」(領)と同じくあまりないようである。おそらく、御巫本『日本書紀』に訓の誤りが生じているのではないかと考えられた。「ツラ」ではなく、「ツ」-「ヲ」の形であろう。

例 27 是日、筑紫大宰、請儲用物、繩一百匹・絲一百斤・布三百端・庸布四百常・鐵一萬斤・箭竹二千連、送下於筑紫。(卷二十九、天武紀下十四年)

しかしながら、仮に「ツ-ヲ」の間違いではなく、「ツラ」の形であるならば、例 27 の対象語である箭竹を、例 3 の対象語である葉盤(ヒラデ)と再び比較しないとならない。『時代別』によると、「葉盤」は「ヒラデ」と読まれ、名詞、柏の葉

を重ねて、竹のくしで刺しとじて平たい皿のように作った食器のことである。「葉盤」の形からすれば、「平たい」の要素は「ヒラ」に対応し、ものの作成方法からすれば、柏の葉と葉との重ね合わせであって、「連なったもの」の要素が「ツラ」に対応する。もしそうであれば、「ツラ」という訓みは、和訓としての意味から考えても、対象語「葉盤」との関連性があり、『日本書紀』では助数詞「枚」の一つの訓みとして認められるだろう。

#### 4.4 「ネリ」、「フル」と読み得る助数詞表記とその対象語

「ネリ」、「フル」と読み得る助数詞表記は、「枚」以外、『日本書紀』にはないようだが、和訓として「ネリ」、「フル」の意味を『時代別』で確かめた結果、「ネリ」は、「ネルの名詞形。練達のこと。たくみなこと。」さらに、「練り鍛えたものを数える助数詞。」と記載され、動詞「ネル<sup>9)</sup>」の連用形から転じた助数詞だと考えられる。

一方、和訓としての「フル」は、『時代別』によると、「振る。振り動かす。」とされ、「一覧」に見出し語「フル」がなく、「フリ」の項目に「刀など」とされる。つまり、動詞「フル」は、連用形に変化せず、そのまま動詞連体形で助数詞化にされただろう。

したがって、「ネリ」は、角弓箭や鉄鋌を鍛錬する際の手法であり、「フル」は、おそらくネリガネを練達するとき、振り動かす動詞「フル」を助数詞にした語であろう。

#### 4.5 「ヒラ」と読み得る助数詞表記とその対象語

「ヒラ」と読み得る助数詞表記は、「枚」を除いて、『日本書紀』にみられるのは「張」のみである。「張」は、主に弓、韋、鹿皮に用いられる助数詞であり、用例が以下の通りである。

例 28 六月、遣内臣闕名使於百濟、仍賜良馬二匹・同船二隻・弓五十張・箭五十具。(卷十九、欽明紀十四年)

〔史〕：〔尺〕ハリ 〔北〕：訓なし 〔右〕：ハリ 〔闕〕：ハリ

例 29 元年春正月辛卯朔丁巳、賜百濟佐平鬼室福信矢十萬隻・絲五百斤・綿一千斤・布一千端・韋一千張・稻種三千斛。(卷二十七、天智紀元年)

〔史〕：ヒラ 〔北〕：訓なし 〔勢〕：A 訓なし 〔右〕：ヒラ 〔闕〕：ヒラ

例 30 以外郡司、各刀一口・鹿皮一張・鏝一口・刀子一口・鎌一口・矢一具・

稻一束。(卷二十九、天武紀下五年)

〔史〕：ヒラ 〔北〕：ヒヨ 〔勢〕：A ヒラ 〔右〕：ヒラ 〔闊〕：ヒラ

例 31 淨冠至直冠、人甲一領・大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚・鞍馬。(卷三十、持統紀七年)

〔史〕：訓なし 〔北〕：訓なし 〔右〕：ハリ 〔闊〕：訓なし

例 32 勳冠至進冠、人大刀一口・弓一張・矢一具・鞆一枚。(卷三十、持統紀七年)

〔史〕：訓なし 〔北〕：訓なし 〔右〕：訓なし 〔闊〕：訓なし

「韋」と「鹿皮」の二つは、前述の「(口) 薄くて平らな皮革など。動物の革類」の類に当てはまる。ところが、対象語の「弓」は、「薄くて幅の広く、平らなもの」と関係せず、「糸を張ったもの」で、訓み「ハリ」が『日本書紀』卜部家兼右本の例 28 と内閣文庫本の例 31 にて確認できた。『日本書紀』の助数詞「張」には、「ヒラ」も「ハリ」も両方含まれている。「ハリ」は、「糸を張ったもの」に用いる助数詞として、おそらく動詞「張る」から来たのではないかと考えられる。

一方、『時代別』によると、和訓として「ヒラ」は、「形状言。主に名詞と複合<sup>10)</sup>して薄く平らなさまをあらわす。形態上ヒロとは、いわば交替形の関係にあるが、どちらも主に複合語中にあらわれ、ヒロが広さ・拡がりの意であるに対して、ヒラは物の形状をいう」とされている。それで、「ヒラ」は本来薄くて平らなさまを表わし、のち漢文に訓を当てていく中、韋や鹿皮に用いる助数詞表記「張」にあてられただろう。

#### 4.6 「カラ」と読み得る助数詞表記とその対象語

「カラ」と読み得る助数詞表記は、「枚」以外、上代語には「枝」と「口」の二つもある。主に、樹木類、杵、船、鹿角、刀、劍、鐘、鎌、鋏、人間などの対象語に使われている。「一覽」では、「カラ」は、「棒状のもの」を表わす助数詞に対応する訓みだとされているが、和訓としての「カラ」を『時代別』で調べたところ、一つは、「植物の茎や幹」を表わす語であり、「(二) 棒状のもの」に当てはまる。もう一つは、「道具の柄」の意味であり、『倭名類聚抄』<sup>11)</sup>では「柄、音筆病反器物茎柯也、和名衣、一云、賀良」と記載されている。

和訓としての「カラ」は、その意味が植物の茎や幹であろうが道具の柄であろうが、

いずれも棒状のものに対応する助数詞表記にあてる訓みだろう。例 14 においては、対象語の「杖」(ミツエ) に対する助数詞「枚」は「カラ」だと北野本『日本書紀』で確かめられた。他の古写本では、卜部家兼右本のみ「ヒラ」と訓まれたようである。そこで、和訓としての「ヒラ」にある本来の意味(薄くて平らなさま) から離れ、関係のない棒状のものに「ヒラ」の訓みをあてている。つまり、棒状のもの「ミツエ」には助数詞表記「枚」によってあてられた「ヒラ」の可能性があろう。

助数詞表記「枝」は対象語(杜樹、出石杵、賢木、船、鹿角)によって、訓みが異なってくる。なお、各古写本では、「カラ」の訓みは見当たらなかったが、『日本書紀』において、「エ」、「エタ」は、枝、枝をもつもの(杜樹、賢木)に用いる助数詞の訓みであり、「マタ」は、枝分かれ、二つに分かれたもの(船、鹿角)に用いられる助数詞の訓みである。「ツ」は、万能的で、多種類の対象語に用いられ、棒状のもの(出石杵)にあたる訓みとなる。

助数詞表記「口」に関しては、「枝」と同じく『日本書紀』には「カラ」の訓みが見当たらなかったが、「ツ」(「チ」を含む)、「ユ」、「タリ」、「タへ」、「リ」、「クチ」、「ヒト」七つほどの訓みが確かめられた。この中、「ユ」「タリ」「タへ」「リ」「ヒト」の五つは、奴、掖玖人、夜勾人、奴婢などに、「クチ」は斧<sup>12)</sup>に、「ツ」(「チ」を含む)は槽、出石小刀、劔、七枝刀、大刀、鐘、鍬、神刀などに対応している。

## 5. まとめ

以上の結果を次のようにまとめる。

- 1、『日本書紀』における助数詞「枚」は、十七種の対象語があり、「ツ」(「チ」も含む)、「ネリ」、「フル」、「ヒラ」、「カラ」計五つの訓みも見られる。なお、汎用性の高い「ツ」に対し、「ネリ」と「フル」の対象語は、角弓箭と鉄鋌の二種のみである。また、五つの訓みの中、現存の古写本(岩崎本)の確認により、「ツ」は最も早く使われ、その次にくるのは「ヒラ」だと考えられる。
- 2、『日本書紀』では、助数詞「枚」の訓み「ツ」に対する助数詞表記が最も多く、性質や形状のさまざまなものに用いられるものの、動物の革類には用いられていなかった。「(口) 薄くて平らな皮革など。動物の革類。」の分類には「ヒラ」の訓みのみ用いられる。用字としては、「(口)」には、「枚」、「張」の二字のみ使用されている。
- 3、「ツ」と読み得る助数詞表記の中、具体的なものに用いられる助数詞もあれば、

「歳」や「年」のような抽象的概念に使われる助数詞もある。

- 4、『日本書紀』においては、1で示した五つの訓み以外、「キ」と「ツラ」の二つも看過できない。「キ」は、動詞「キル」の連用形による助数詞であり、訓みからだと、助数詞「枚」との関連付けがあまりないように思われる。しかし、対象語を見ると、汎用性の高い「枚」は、中国語の影響を受け、衣服や着るものに使われるケースも少なくないため、「キ」の可能性も考えられよう。また、4.3で述べたように、例3の対象語「ヒラデ」には「連なったもの」の要素が入っているため、「ツラ」という訓みも考えられる。しかし、五つの訓みと比較すると、「キ」と「ツラ」とに訓まれる可能性が低いという認識でよいだろう。

以上本稿では、『日本書紀』の助数詞「枚」の用法と古訓のあり方を調査することによって、『日本書紀』助数詞「枚」の漢語としての多様な用法に対して、それに相当する訓を和語の用法に従って訓み分けようとしていることを見てきた。今回の調査結果を踏まえ、今後、助数詞「枚」のほか、『日本書紀』における他の助数詞についても、その用法と和訓のあり方について、実態を調査することで、古代語助数詞における漢語と和語とのありかたについて考えていくことにする。本稿はその出発点に位置づけられるものである。

## 注

- 1) 助数詞については、三保(2010)は、「『助数詞』とは、日本文法論上の用語であり、数を表す語の下に付いて、それがどのような事物の数量であるかを表す語である。(中略)文字資料が、比較的よく残っているのは七世紀末、八世紀である。この時期は、日本律令国家の確立期でもあり、多くの木簡資料や行政文書、また、「記紀」や『万葉集』などが現存している。(中略)既に助数詞がよく使われ、その使い方も、かなり安定的状態にあったと知られる。」と述べている。
- 2) 日本の上代に遡ってすでに存在していた助数詞は、訓みがどうなっているか、また対象語(助数詞の使用対象)との対応関係がどうなっているのかを明白したいため、ものの長さ、高さ、大きさまた重さなどに関する度量衡の単位として用いられた助数詞を、今回の考察対象外とする。
- 3) 王鼎(2019)の「助数詞「枚」の史的展開について」29-30ページ表1による。
- 4) 井上通泰・山田孝雄・新村出、正宗敦夫校訂編纂、1986年、風間書房
- 5) 中田祝夫・峯岸明『色葉字類抄研究並びに索引』、1964年、風間書房

- 6) ウェブサイトに掲載されている『日本書紀』原文検索を用いた。底本は、岩波古典文学大系本（ト部兼方・兼右本）である。（[http://www.seisaku.bz/shoki\\_index.html](http://www.seisaku.bz/shoki_index.html)）
- 7) 石塚晴通・築島裕（1978）『東洋文庫蔵岩崎本日本書紀本文と索引』によるもの。
- 8) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系 67 日本書紀上』岩波書店、1979 年のものを指す。
- 9) 「ネル」は、「練」と表記する。練る、きたえる、練成する意である。『時代別国語大辞典上代編』による内容。
- 10) 接頭語や接尾語として用いられる。「ハナビラ」（花びら）や「タヒラ」（平）などは、その関連例である。
- 11) 馬淵和夫著（1973）『和名類聚抄 古写本声点本 本文および索引』（風間書房）によるもの。二十巻本系・古活字版。
- 12) 分類としては、「上代語助数詞一覧」により、「武器・道具類」と記載。

## 参考文献

- 王鼎（2019）「助数詞「枚」の史的展開について」『日中語彙研究』第 9 号 27-38、愛知大学中日大辞典編集部
- 京都大学文学部国語学国文学研究室（1973）『天治本 新撰字鏡 増訂版』、臨川 1 書店
- 上代語辞典編修委員会編（1967）『時代別国語大辞典 上代編』、三省堂
- 築島裕・石塚晴通（1978）『東洋文庫蔵 岩崎本 日本書紀』、財団法人日本古典文学会発行、貴重本刊行会刊行
- 中田祝夫・峯岸明（1964）『色葉字類抄研究並びに索引』、風間書房
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部（2000）『日本国語大辞典』第二版第七巻 小学館
- 馬淵和夫著（1973）『和名類聚抄 古写本声点本 本文および索引』、風間書房
- 三保忠夫（1995）「日本書紀における助数詞について」『鎌倉時代語研究』第 18 巻、pp.79-107.
- 三保忠夫（2000）『日本語助数詞の歴史的研究：近世書札を中心』、風間書房
- 三保忠夫（2004）『木簡と正倉院文書における助数詞の研究』、風間書房
- 三保忠夫（2010）『日本語の助数詞—研究と資料—』、風間書房
- 安田尚道（2015）『日本語助数詞の歴史的研究』、武蔵野書院